

パッカーのケースレポート 執筆完全ガイド

訳：鹿野 泰寛

症例報告はなぜロートレアモンの詩より詩なのか

本書は症例報告の現在と歴史を取り上げることから始まる。まず序章の一節を紹介したい。書評をするにあたって、一部を取り上げるのはどうかという面もあるが、あえて引用から始めてみる。

「症例報告は思いもよらないところから生まれることがある」

マルドロールの歌の「解剖台の上での、ミシンとコウモリ傘の偶然の出会いのように美しい」を思い出す。「診察室での、医師と患者との偶然の出会いのように美しい」。ちょっと無理があるかもしれない。本書に沿ってさらに言い換えてみる。「患者での、コカ・コーラと低 K 血症の偶然の出会いのように美しい」「患者での、アテノロールとバイオリニストのピブラートとの偶然の出会いのように美しい」。何のことだかわからないかもしれないが、なんだか面白そうな感じがするのではないだろうか。

症例報告には長い歴史がある。その発端は臨床医の主観的観察から始まる。しかしその主観は、科学の枠組みのなかで客観に向かう必要がある。1946年から76年の30年間、一般医学雑誌に掲載された論文のうち38%が症例報告であったのに対し、その割合は時代とともに減少する。その背景にはランダム化比較試験を重視するEBMの登場と普及がある。ところが、1990年代後半になると症例報告は再び増加に転ずる。EBMが重視する臨床研究は集団に対するものでしかなく、個々の

患者レベルでは適切に機能しない現実があるからだ。さらにEBMとの関連でいえば、EBMに対して、NBM (narrative-based medicine) の登場と症例報告の増加がシンクロしている。集団を扱う臨床研究からこぼれ落ちる個人を症例報告によって拾い上げることが、次の集団対象の臨床研究にもつながる。

予想される仮説を探索したり、あらかじめ設定された仮説を検証したりという臨床研究に出会いはない。偶然からも多様性からも真逆な位置にある。ただその反面、バイアスが少なく、偶然の影響が考慮され、科学的という大きなメリットがある。それに対して症例報告はどうか。「思いもよらぬ」「予期せぬ」ということが発端にある。「偶然や多様性がある」と言い換えることもできる。もちろんそこには臨床研究で考慮すべきバイアス、偶然を多く含むという大きな問題がある。しかしそのバイアス、偶然こそが、医者の主観的観察という症例報告の端緒である。単なる偶然と思われることや観察者の主観的バイアスではないかという考えから、偶然やバイアスの結果ではないと考えてみるのも、主観的でありつつ、実は科学的ということでもある。主観が客観につながったり、客観が主観に過ぎなかったりということも日々経験するところだ。臨床医は常にこうしたねじれのなかに身を置いている。身を置くしかないといったほうが適切かも



MEDSi
4,620円(本体4,200円+税10%)
A5/208頁
ISBN978-4-8157-3141-0

しれない。そして、このねじれのなかに身を置いていることが、医者の主観的観察と患者の偶然とバイアスの結果かもしれないさまざまな所見の「美しい出会い」につながっている。単に主観的であるばかりでなく、単に科学的であるだけでなく、複雑怪奇なその関係は、これは「ミシンとコウモリ傘の偶然の出会い」に匹敵する美しさではないか。あるいは多くの医者にとって、個別の体験としては、さらに美しいものではないだろうか。

「偶然の出会い」を捕まえて症例報告としてまとめることは「美しい」。ロートレアモンを思い出したのはそういうことなのだろう。本書は単に症例報告を書くためのガイドというだけでなく、とにかく読み物としても面白い。多くの臨床医に本書が届くことを期待している。

●参考文献、図書

- ・ロートレアモン著、栗田 勇訳、マルドロールの歌、現代思潮社、1987。
- ・現代詩文庫52 寺山修司詩集、思潮社、1972：15-7。
- ・名郷直樹の研修センター長日記 東京都の電話帳に興味を持つ<https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2007/PA02719_06>

名郷 直樹
(武蔵国分寺公園クリニック)